

【優秀賞】

クリスマスプレゼント

清水知華子・大阪府

今年も秋が近づいてきた。毎年この季節になると、教室の講師机の中にあるひざ掛け毛布を出して陽に当てる。日光の中に漂い舞う細かい纖維を眺めながら、私はいつも原点に立ち戻る。

二十年前、小さな英語塾を始めた。離婚して実家に戻った直後の四月のことだつた。家でじつとしているのも辛く、何か始めたいと思つたのがきっかけで、計画も企画もないまま地域の月刊情報誌に広告を出した。

「英語教えます（幼稚園児から大人まで）」

短い文のあとには、名字と電話番号だけしか載せていない、全く具体性に欠ける広告だ。地域の情報誌は文字数で広告掲載価格が決まる。財布と相談したらこれが限界だつた。当時はまだ携帯電話も普及しておらず、広告には実家の電話番号を載せていた。情報誌が配布された日、私は電話の前に座り込んだ。一本もかかつてこなかつたらどうしよう。だけど、かかつてきたらどうしよう。鳴らない電話のそばで待ちくたびれた頃、暗くなり始めた部屋にベルが鳴り響いた。

電話は中学生の母親からだつた。学校でも塾でも英語の授業についていけない息子を通わせたいとの相談だつた。

何の準備もしていなかつた私は、慌てて地域の集会所を借りる手配を済ませ、教科書を準備した。

次の週、母親に連れられてその男子中学生はやつてきた。金色に近い前髪を長く伸ばし、こちらからはほとんど目が見えず、表情がわからない。彼だけを教室に通し、向き合つた。

「英語、好きちやうの」私が聞く。

「嫌いや。全然わからへん」

前髪の奥からちらつとこちらを窺い、見かけによらない、人懐こい一面をみせた。

(結婚してすぐに子どもを産んでいたら、このぐらいの子どもが私にもいたのかな)

そんな後悔にも似た哀切の思いが込み上げてくる。

「なあ、協定、結べへん」

駄目もとの提案だつた。そもそも「協定」という言葉が適切な使い方だつたかどうかもわからない。けれど彼は意外にも興味を示した。

「私が言うことをきつちりやつてくること。そしたら絶対、山川くんの得意科目は英語になる。保証する」

彼は伏せ目がちに口元を緩め、軽くうなずいた。

馬が合う、とはこういうことをいうのかもしれない。口数は少なくぶっきらぼうで、何を考えているのかよくわからない。それでも山川は私との約束を守り、半年ほどすると、

確かに英語は彼の中で最も得意な科目となつた。

もちろんその半年間が順風満帆であつたはずはない。何度も家まで迎えに行つた。何度も机を叩いて怒り、何度も「こんなん協定になれへんやん」と怒鳴つた。その度に山川はふてくされ、その度に私は諦めかけた。でも何故か心の片隅にある彼への期待が消え去つたことは一度もなかつた。山川も、投げやりになることはあつたが、決して私から離れないかなかつた。

冬休みに入ったころ、いつも通り山川は集会所にやつて來た。椅子に座ると、通塾力バーンから赤いリボンのついた包みを取り出し、素っ気なく私に手渡した。開けてみると、出てきたのはクリスマス模様の大判のひざ掛け毛布だつた。

「あんた、これ…」

それ以上言葉が出なかつた。涙が湧きあがつてきたが、生徒の前で泣きたくなどない。私はそのひざ掛け毛布で顔を覆つた。

「先生、顔に使うん違うで」

山川の優しさに気付いていないわけではなかつた。教室に一つしかない電気ストーブを山川の足もとに向けると、「オレ、さむないって」と足で突き返す。そう言いながら次の日には、もこもこの重ね着でやつてくる。そんな山川が、冷えてくるとこつそり腿を擦る私に気付かないはずもない。

「ありがとう」

すすり上げながらやつと私が言うと、彼は照れたように微笑んだ。

「小遣いで買ってんからな」

「わかってるよ」

私は泣きながら笑つた。

集会所から始まつた英語塾は、今では駅前ビルの一階フロアを借り、受付と教室を展開するまでになつた。冷暖房完備で、もうひざ掛けは必要ない。それでも冬になると、私はこのひざ掛け毛布を腰に巻く。生徒たちは「ぼろぼろやんか」とか「ダサい」とか日々に騒ぐ。毎年、年末に顔を見せにくる山川も「いい加減、捨てて下さいよ」と呆れ氣味だ。だけど捨てるわけにはいかない。無計画でぼんやりと生きていた私に、講師としての自信と力を与えてくれたこのひざ掛けは、私の原点だ。これからもきっと頑張れる、そんな思いを湧きあがらせてくれる原動力である。